人文科教育研究　14　1987年　pp. 125−130

「言語の非記号性」の批判的検討
——丸山圭三郎のソシュール解釈をめぐって——

戸田　功

ソシュールの『一般言語学講義』は，現代の言語学，さらには人文科学全体の基礎論として重要な位置を占めるものであるが，その複雑な成立事情が原因して様々な矛盾や誤解を誘うような不完全な表現等をその中に含んでいる。現在ではゴデルやエングラー等の厳密な文献学的研究のおかげで『講義』を巡るそのような問題の大半は解決し，[1]我々はソシュール自身の思想を直接問題にすることができるようになった。ゴデル以後のソシュール研究者は，それ以前の研究者達を第一の世代とするならば，第二の世代ということになる。

日本においては，丸山圭三郎が第二世代のソシュール研究者としてその成果を紹介している。[2]我々の大部分は，彼を通じてソシュール研究の新しい局面に関する知識を得ることができたのであり，その意味で彼の業績は特筆すべきものがある。けれども我々が丸山の著作だけによって第二世代の研究成果に接しているうちは，『講義』のみしかなかった第一世代と同じような立場に置かれていることになる。我々はまず丸山の研究成果をそのまま鵜飲みにするのではなく，その根拠を踏まえて客観的に検討する必要がある。そこにおいて初めて丸山のソシュール研究史上の意義が確定することになり，我々のソシュール研究も自らの足で歩き始めることができるようになるだろう。

ゴデルやエングラー等の労作のおかげで明らかになったソシュール像をもとに，丸山はソシュールの言語思想の根底には「コトバは記号ではない」という認識があると主張する。[3]我々の理解するソシュールは，言語を記号の体系として対象化することによって，その理論が現代の言語学に決定的な影響を与えた人である。丸山の主張は我々には驚くべきものとして映る。しかしながら，丸山がゴデル，エングラー等をふまえている限りそこには何らかの文献学的な根拠があるはずであり，その解釈は何らかの正当性を持っているはずである。本稿においては，ソシュール研究史上画期的であるかもしれない言語の非記号性という問題を丸山の挙げる文献学的な証拠を通して検証し，その当否を判定しようとするものである。

丸山が，上記の判断の根拠として挙げているソシュールの言説は，以下の通りである。[4]

①3295a，N 9／物質的な音に対置し得るもののうちに，観念があるということは，根底から……否定せねばならない。物質音に対置可能なものは，《音＝観念》であって，絶対に《観念》ではない。

②3299，N12／コトバについて哲学者がもっている，あるいは少なくとも提供している考え方の大部分は，我々の始祖アダムを思わせるようなものである。すなわち，アダムはさまざまな動物

を傍に呼んで，それぞれに名前をつけたという。……コトバの根底は名前によって構成されてはいない。……それにもかかわらず，〔哲学者の考えには〕コトバが究極的にいかなるものかを見る上で，我々が看過することも黙認することも出来ないある傾向の考え方が，暗黙のうちに存在する。それは事物の名称目録という考え方である。

それによれば，まず事物があって，それから記号ということになる。したがって，これは我々が常に否定することであるが，記号に与えられる外的な基盤があることになり，コトバは次のような関係によって表わされるだろう。

$$\text{事物}\left\{\begin{array}{l} *\text{——}a \\ *\text{——}b \\ *\text{——}c \end{array}\right\}\text{名称}$$

ところが，真の図式は，a－b－cなのであって，これは事物に基づく＊——aといったような実際の関係のすべての認識の外にあるのだ。

③3303,N14a ／言語学において，第一の秩序である音と，第二の秩序である意味を選り分けることができるなどと考えることは，大いなる幻想であることは別のところで確認した。その理由は簡単である。根底的に言って言語事象なるものは，これら二つのもののいずれによっても構成されることがあり得ず，それが存在するために要請されるものは，一つの対応関係，一つの相関関係であり，いかなる瞬間にも，一つの実質もしくは二つの実質ではないからなのだ。

④3310-11～3311-1,N15／セームなる語とシーニュなる語の相違，もしくはセームを用いる利点。

シーニュは非音声的でもあり得る。これはセームも同様。しかし，シーニュは直接的所作，すなわち，体系と慣習の外にあるものをも意味し得る。セームは体系に属し，……シーニュの総体，すなわち記号であり同時に意味であるものを表わす。

セームはただ音声とその担う意味によって存在するのではなく，他の諸セームとの相関によって存在する。

⑤3313,N15／記号を個別に即自的なものとして捉える誤謬。——五百の語からなる一つの言語が，五百の記号と五百の意味を表わしていると考えることは誤りである。——あるいはまた，語が他の語（パラセーム）に取り囲まれていることを忘れて，語とその意味を語ることができると思っている間は，言語現象について何らかのイメージをもてると考えたら間違いである。

⑥3315,N15／語る主体は自らが発声するアポセーム aposème〔コトバの抽象的な表現面〕も意識しないし，他方純粋観念も意識しない。彼が意識しているのはセーム sème〔体系内の事項であり，表現と意味が一体化した記号〕だけである。

⑦3320,N15／シーニュを捉え，空中に浮いている気球のように決して逃がさずに追っていくことが出来るのは，その本質を完全に理解した暁でしかない。——その本質は二重であるが，だからといって気球をふくらませない限りは，その気嚢から成るのでもなく，水素からなるのでもない。気体水素自体は，気嚢がなければ何の価値ももたない。——気球が《セーム》であり，気嚢

が《ソーム》である。しかしこれは気嚢がシーニュで水素がその意味であるなどという考え方とはほど遠い考え方である。もしそんな考え方に立てば，気球の意味はどこにもなくなってしまうからだ。気球隊員にとっては気球がすべてであるのと同様に，言語学者にとっては，セームがすべてである。

⑧1802, ⅡR ／言語事実を持つ以前に一般的観念について語ることは，牛の前に鋤をつける如き転倒である。

⑨1829, ⅡR ／本質的には混沌としている思考も，それが分解されることによって否応なしに正確なものとなり，コトバによって単位として分節化される。

⑩1831, ⅡR ／二つの無定形な塊の譬えとして，水と空気を考えてみよう。気圧が変われば，水の表面は一連の単位へと分解される。これが波である。これは空気と水の中間に介在する連鎖であって実質を形成しはしない。この波動が二つの結合を表わし，言ってみれば，思考と，それ自体は無定形な音の連鎖との合体を表わしている。二つの組み合わせが，一つの形相を生みだすのである。

⑪1916, ⅡR ／音が語における二次的なものであり相対的なものであるという事実は逆説的に見えるかもしれないが，このことは語や単位に結びつけられている観念についても言えるのであって，観念のみでは価値の一面しか現わさず，これは純粋心理学の対象物でしかない。

⑫1095, 1096, ⅢC ／すでに見たように，言語記号は二つのまことに異なった事象の間に精神が樹立する連合であるが，それらの事象は二つとも心的なものであり主体の中に存在する。一つの聴覚映像が一つの概念に連合されているのである。聴覚映像は物質音ではない。これは音の心的な刻印である。

⑬1163, ⅢC ／概念と〔音の〕イメージの結合である全体をシーニュと呼ぼうとしているのか，聴覚映像自体がシーニュと呼ばれ得るのかを知る必要がある。いかなる場合にも arbos（樹）がシーニュと呼ばれるのは，それが概念を担っている限りにおいてでしか絶対にあり得ないのだ。そこに解決すべき用語上のポイントがある。シニフィアンは聴覚的なものであり，シニフィエは概念的なものであって，これら二つがシーニュの構成要素である。用語を変更した理由は次のようなものである。一つの記号体系を内部から考察する時には，シニフィアンとシニフィエを措定する，もしくは対置することの意味がある。こうすることによって二つのものが対座させられるからであり，〔音の〕イメージと概念という対立を傍にのけておくことになるからである。

⑭1165, ⅢC ／《シニフィアン》と《シニフィエ》なる用語を用いることによって，この二つの真理の形に一つの修正が加えられるであろう。用語を変更した理由は次のようなものである。一つの記号体系を内部から考察する時には，シニフィアンとシニフィエを措定する，もしくは対置することの意味がある。こうすることによって二つのものが対座させられるからであり，〔音の〕イメージと概念という対立を傍にのけておくことになるからである。

⑮1699, ⅢC ／言語の実体を，科学合成物，たとえば水に譬えることもできよう。水は水素と酸素から成っているH_2Oである。おそらく，化学においては，それらの元素を分離して，酸素と水

素を別々にとり出しても，化学の次元にとどまっている。その反対に，もし言語の水を水素と酸素に分けてしまったら，もはや言語学の次元にはいないことになる。すでに言語的実体は存在しないのだから。

⑯ 1821～1824, ⅢC／心理的に，言語を捨象して我々が得られる観念とは何であろうか。そんなものはたぶん存在しない。あるいは存在しても，無定形と呼べる形のもとにでしかない。我々はおそらく，言語の助けを借りずには（もちろん内的言語 langue intérieure のことであるが）二つの観念を識別する手段をもたないだろう。したがって，それ自体において捉えられた，我々の観念の純粋に概念的な塊は，つまり言語から切り離された塊は，一種の形をもたない星雲のごときものであり，そこでは当初から何ものをも識別し得ない。また今度は言語の側からみても，さまざまな観念は一切既存のものを表象してはいない。次のようなものは存在しないのだ。

（a）他の諸観念に対して，あらかじめ出来上っていて，まったく別物であるような観念。

（b）このような観念に対応する記号。

そうではなくて，言語記号が登場する以前の思考には，何一つとして明瞭に識別されるものはない。これが重要な点である。

⑰ 1825, 1826, ⅢC／一方，この全く混沌とした領域に対面する音の領域が，あらかじめ明瞭に識別できる観念や単位を提供しているかどうか問うてみることも無意味なことではあるまい。音の領域においてもまた，あらかじめ区切られた，はっきりと識別できる単位は存在しないのである。

一連の音が，それ自体において一つの鋳型であるというのは偽りである。これもまた，それ自体においては思考と同じように混沌たる物質なのだ。

⑱ 1846, ⅢC／この (SE SA) ↑という図はおそらく存在理由をもっているであろうが，これが価値の二次的産物に過ぎないこともわかる。シニフィエのみでは何物でもなく，それは形のない塊の中に溶解してしまうだろう。シニフィアンの方も同じことなのだ。

⑲ 1887, 1888, ⅢC／いくつかの実例を挙げよう。仮に観念なるものが言語の価値となる以前から人間精神内においてあらかじめ決定されているとしたら，必ずや起るであろうことの一つとして，ある言語の辞項と他の言語の辞項とは正確に一致するはずである。たとえばフランス語の cher（親愛な）とドイツ語の lieb とか theuer（愛する，親しい）はどうであろうか。正確な照応はない。

juger, estimer（判断する・評価する）と urteilen, erachten（ほぼ同意）を比べてみても，ドイツ語の表現の中には，フランス語の表現と部分的にしか一致しない意味群の総体が見出される。言語以前に存在するような即自的な cher の観念などないことがわかるのである。

⑳ 1894～1897, ⅢC／そこで，どんな場合にも，我々が捉えて直面するのは，あらかじめ与えられた観念ではなく，体系に内在する価値である。その諸価値がかくかくの概念に対応するとのべる時は，人は言外に次のようなことを言っている。すなわち，これらの諸概念は，自らの内容によって積極的に定義されるのではなく，体系の他の諸辞項との間に保つ関係によって否定的に定義される，純粋に示差的な存在であるということ，概念のもつ正確な特性は，それが他のもので

はないということなのである。

㉑1899, Ⅲ C ／㊀↑という図式はしたがって言語においては一次的なものではない。 cher の価値は二つの面から決定される。観念自体の輪郭，これこそ一言語が我々に与えてくれるところの，諸観念の語への配分なのである。この輪郭が与えられてはじめて，㊀↑という図式は考察の対象となり得るだろう。

㉒1911, Ⅲ C ／厳密に言うと，シーニュがあるのではなくて，シーニュ間の差異があるだけである。チェコ語の例をひこう。妻という意味の žena の複数属格は žen である。この言語の中にあって，žena，žen の存在価値は，以前にも在していた žena とその複数属格 ženů と全く同様である。どちらがより優れている対立とも言えない。……シーニュ間の差異だけが働いている。ženů の価値は，それが žena と異なることから生じ，žen の価値もそれが žena と異なることから生ずる。

㉓1941, Ⅲ C ／未来の概念は，ラングの記号によって，未来と他の概念の間に形成される差異次第で存在し，その大きさも差異次第ということになろう。こうして我々は，観念の差異に結びつけられた音の差異としてのラングの全体系に直面することが出来る。与えられた積極的な観念は一つもなく，また，観念の外にあって決定される聴覚記号は一つもない。

以上のソシュールの言説から，丸山は大きく分けて次の二つの見解を読み取っている。まず第一に，事物や概念に先立ってあるところの言語の体系性（関係性，差異性）。そして第二に，言語の体系性から導き出されるところの言語記号の二面性である。第一の例としては，②，⑤，⑧，⑨，⑯，⑰，⑲，⑳，㉑，㉒，㉓が，第二の例としては，①，③，④，⑥，⑦，⑩，⑪，⑫，⑬，⑭，⑮，⑱が，それぞれ相当する。さらに，二つの見解のそれぞれに恣意性という特質が付与される。恣意性においても第一の見解である言語の体系性における恣意性から，第二の見解である言語記号の二面性における恣意性が論理的に帰結される。記号表現（シニフィアン）と記号内容（シニフィエ）との間の結び付きが恣意的であるというソシュールのいわゆる第一原理は，論理的には，言語記号の体系性という第一の見解から導き出されるのである。第一の見解とそれから論理的に帰結される第二の見解は，言語が単なる名称目録ではないという事実を示し，その事実は，一次的には，コトバが既に区切られた言語外現実を指し示すものではなく，自らの内に意味を担っているという理論を導き出す。言い換えれば，言語記号は，他の一切の記号と異なり，自らの外にア・プリオリに存在する意味を指し示すものではなく，いわば表現と意味とを同時に備えている二重の存在であるということが主張されるのである。[5)]

以上が，丸山がソシュールの言語思想の根底に「コトバは記号ではない」という認識があると主張する根拠である。簡単に言い換えると，「コトバは記号ではなく，記号の体系である」ということになる。すなわち，言語記号は体系的な差異からのみなるものであるから，ネガティヴな形でしか存在し得ず，ポジティヴなものとして一般に考えられているいわゆる「記号」ではないということである。この見解はゴデル・エングラーを俟つまでもなく，すでにソシュール研究上

の常識とも言えるものであり，そのような体系的な差異からのみなるものをわれわれは記号と呼んで来たのである。[6]その記号が，丸山によればとりも直さず「非記号」の根拠であるということになる。

ここにおいて，我々は冒頭の問題に回答を与えることができる。丸山において，言語の非記号性という場合の「記号」とは，日常の経験に根ざした「コトバは事物や概念の記号である」という，いわば一般常識としての「記号」を意味している。その主張は決してソシュール的な記号を否定するものではなく，むしろソシュール的な記号に拠った主張である。つまり，丸山の一見ショッキングな主張は，ソシュールを知らない一般の人々のために便宜的に使われたにすぎない言いまわしであって，ソシュール的に言えば，むしろ彼の言語思想の根底には「コトバは記号である」という認識があるといった方がふさわしいのである。そこで我々は，一般に使われる「記号」はじつはソシュール的な見地からは記号ではないのであって，それこそが「非記号」であると逆に主張することも出来るだろう。そこから振り返ると，丸山の主張は視点を一般常識の側にとどめることによってソシュール研究の本来のありかたから逸脱してしまったものとして我々には映らざるを得ないのである。

注

1)ソシュール文献学の代表的な業績は次のようなものである。

Robert Godel : Les Sources manuscrites du Cours du linguistique générale de F. de Saussure, Geneve, Libraire Droz, 1957.

Rudolf Engler : Cours, de linguistique générale, édition critique, faciculel-4, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1967-74.

Tullio De Mauro : Corso di linguitica generale, introduzione e commento du Tullio De Mauro, Bari, Edizioni Laterza, 1967.

2) 1970 年代初頭から発表してきた諸論稿をまとめた『ソシュールの思想』岩波書店，1981. は彼のソシュール研究の一つの達成と見ることができる。

3)丸山『ソシュールの思想』116, 167, 195, 237, 241, 246, 247, 250, 254 頁

4)同書，第Ⅰ部第3章3．記号理論，第Ⅱ部第1章2．コトバの非記号性において，非記号性の根拠として引用されているソシュールの言説を全て抽出し，年代順に並べかえて通し番号を付した。訳文は原典を参照した後，丸山の訳文を採用した。冒頭通し番号の後にあるのは断章番号で，Nは手稿を，ⅡRは第2回講義でのリードランジェのノート，ⅢCは第3回講義でのコンスタンタンのノートを表している。

5)同書，119, 120, 144, 145, 146 頁

6) Emile Benveniste : Problèmes de linguistique générale, tome Ⅰ, Gallimard, 1966. 54 頁
バンヴェニスト，岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』みすず書房，1983. 61 頁